

# カントボーイ入院中♡お医者さんと種付け交尾♡

## 体験版

1

白を基調とした無機質な特別病棟の個室。消毒液の匂いが微かに漂うその部屋で、桐島翔太（きりしましやうた）は、ベッドの上に力なく座っていた。

二十三歳の翔太は、男性としての戸籍を持ち、骨格も声も一般的な青年そのものだったが、彼には決定的な違いがあった。両足の間に、男性器が存在しないのだ。その代わりに、柔らかなひだに包まれた女性器がひっそりと隠されている。いわゆる『カントボーイ』と呼ばれる極めて稀な身体構造を持っていた。

「翔太くん、今日の調子はどうかな？」

ノックの音とともに、穏やかな笑みを浮かべた中年の医師が病室に入ってきた。彼の主治医であり、この大学病院でも権威ある医師の一人、田所欣一（たどころきんいち）だ。四十六歳という年齢相応の落ち着きと、銀縁眼鏡の奥で優しげに細められた瞳。翔太にとって、自身の特異な身体を偏見なく診てくれる田所は、唯一の救いのように思えていた。

「田所先生……。はい、体調は悪くありません。ただ、少し……下腹部が熱いというか、疼くような感覚があつて」

「なるほど。ホルモンバランスの調整期間だからね。君のその特別で、美しくも愛らしい身体が、正しい反応を示している証拠だよ。さあ、今日も診察を始めようか」

田所は慣れた手つきでベッド周りのカーテンを閉め切った。密室となった空間で、田所の声色がほんの少しだけ、甘く、そして粘着質なものへと変化したことに、翔太は気づいていなかった。

「ズボンと下着を下ろして、脚を開いてごらん。大丈夫、恥ずかしがることはない。僕は君の全てを受け入れているからね」

田所の優しく、甘やかすような声に促され、翔太は躊躇いながらも薄いパジャマのズボンと下着を膝まで下ろした。シーツの上に仰向けになり、ゆっくりと両脚を開く。男らしい筋肉のついた太腿の間に露わになったのは、無毛でツルツルに処理された、瑞々しい秘裂だった。

「ああ……なんて綺麗なんだ、翔太くん。君のここは、いつ見ても芸術品のように美しい」

「ひっ……、せ、先生……見すぎ、です……っ」

「恥ずかしがる顔も可愛いよ、翔太くん。君は本当にいい子だね。ほら、僕の手が冷たくないか、確かめてごらん」

田所は医療用の潤滑ゼリーを指先にたつぷりと塗ると、翔太の柔らかな太腿の内側を優しく撫で上げた。老獪なサイコパスとしての本性を隠し持つ田所は、暴力ではなく『甘い洗脳』によって患者を支配する天才だった。

「ひゃっ……あ、先生……っ、そこ……」

「ん？　ここは敏感なのかな？　それとも、もう僕に触られるのを楽しみに待っていたのかな？　ほら、見てごらん。まだ指を入れる前なのに、君の可愛い割れ目は、こんなにもトロリーと蜜をこぼして泣いているよ」

「ちがつ……これは、病気の、せい……っ」

「病気じゃないさ。君が『女の子』として、僕に可愛がられたがっている証拠だよ。いい子だ、もつと脚を開いて。僕に全部見せて」

田所の人差し指と中指が、ぬちゃり、と音を立てて翔太の秘裂をなぞった。敏感な大陰唇をかき分け、その奥に隠された真珠のような突起――クリトリスを、指の腹でチロチロと弄る。

「あ、っ！？　ひ、あ、っ……！　先生、そこっ、だめえっ……！」

突如として脳天を突き抜けるような快感に、翔太の口から濁った悲鳴が漏れた。男としてのプライドが、その甘美な刺激の前で脆くも崩れ去っていく。

「だめじゃないよ、翔太くん。君のここは、こんなにも僕の指を喜んでいるじゃないか。コリコリしてて、すごく可愛いね……。よしよし、いい子だ。もつと気持ちよくしてあげるからね」

田所は甘い言葉を囁きながら、指先の動きを早めた。ゼリーと翔太自身の愛液が混ざり合い、ぐちゅっ、ちゅぷっ、と卑猥な水音を室内に響かせる。

「あ、あ、っ！　ひい、っ！　あ、あ、あ、あ、っ！　せ、先生えっ！　そこ、こすっ、こすられ、ひい、い、っ！」

「そう、いい声だ。君の男らしい喉から、こんなに甘くていやらしい雌の声が出るなんて、たまらないよ。翔太くんは僕の特別なお姫様だ。ほら、もつと感じて……っ」

田所の指がクリトリスの包皮をめくり上げ、剥き出しになった敏感な肉の玉を直接弾いた。

「んぎいゝいっ！ あっ、あゝあゝあゝあゝっ！」

翔太の身体がビクンビクンと激しく跳ねた。シーツを握りしめる両手は白濁し、目はうつろに天井を彷徨っている。田所の執拗なクリ責めは、翔太の理性を容赦なく焼き尽くしていく。

「すごいね、翔太くん。クリトリスを弄っただけで、こんなにビショビショに濡らして……。まるで発情した犬みたいだ。君は本当に、スケベでいやらしい身体をしているんだね」

「ちが、ちがううっ！ ぼくは、男……っ、あゝあゝあっ！ だめえっ、もう、いくうっ！」

「いいよ、イッてごらん。僕の指で、君の可愛い身体をたっぷり甘やかしてあげるから……ほらっ！」

田所が指の腹でクリトリスを強く押し潰すように擦り上げると、翔太の口から絶頂の叫びが迸った。

「あゝあゝあゝあゝーっ！ んほおゝおゝおっ！」

翔太の脚がガクガクと痙攣し、秘裂からドピュツと透明な潮が吹き出した。それは田所の手を濡らし、シーツに大きな染みを作った。絶頂の余韻に身を震わせ、ハアハアと荒い息を吐く翔太の耳元に、田所は唇を寄せた。

「よくできました、翔太くん。君は僕の、世界一可愛い患者だよ……」

あまあまに囁かれる言葉に、翔太の心は恐怖と、それに勝る強烈な依存と快楽によって、ゆっくりと侵食され始めていた。